日本の季節の移ろいとグラフィックデザインについての研究

Research on the Graphic Design inspired by Japanese Seasonal Changes

■ 李 雪 Xue LI
愛知県立芸術大学大学院　今尾泰三研究室
Aichi University of the Arts

■ キーワード：グラフィックデザイン、季節、植物、伝統色

はじめに

日本人は自然と共存して様々な年中行事を行い、継承してきた。本研究ではその文化的背景を考察し、人々が生活の中で季節を感じることができるようなグラフィックデザインによる作品制作を行うことを目的とする。日本人の社会生活の中に溶け込んでいる、季節の変化を楽しむ文化とデザインこそが、これからの現代社会において自然を享受し、季節や時間を楽しみ、明るく前向きに生活する上で重要となるはずだ。

1. 研究背景

中国では、四季に対する社会活動やデザインの関連性について、あまり敏感でないといえる。特に現代社会では、四季の変化を気にせず季節外れの生活をしている人が多い。例えば、冬の時期に西瓜、イチゴのような夏の果物や野菜を食べ、夏の時期に火鍋を食べたりする。とはいえ、私が生まれ育った北京は、季節の変わり目がはっきりしていることから、四季の変化には敏感であった。日本にも同様の四季があり、古来より日本人は季節の移り変わりに敏感に反応し、四季を大切にして生活をしてきた歴史がある。そして、ものづくりにおいても様々なものに四季を織り込んできた。例えば、日本画、俳句の季語、和菓子、あるいは花見などの日常生活に根差した文化がある。特に和菓子は、季節を先取りして表現しているものが多く、日本の伝統菓子が今なお現代に伝承されていると言える。日本人は春になると桜餅をつくり、春らしい広告やパッケージ生み出し、季節の変化を自然に受け入れている。

また、日本の伝統色も日本独特の空気感を連想させる。例えば、梅雨の紫陽花、浴衣、夏の夜空を彩る、花火などがあげられる。竹林や深い苔の森をハイキングする時、視界に入る色の全てが緑になり、自らも色と一体化する感覚がある。また、満開の紫藤棚の下で深呼吸をすると、紫藤の花の香りが藤色に感じたこともある。これらは日本独自の空気の色といえるだろう。日本の歴史や自然とともに育った様々な伝統色の文化、それぞれの色が持つエネルギーは個性的である。日本のこのような色彩に着目し、天候や時間の変化により移りゆく自然環境や景観構成要素の違いと、色とそれを取り囲む周辺環境との関係、心に与える影響を明らかにしていく。

2. 日本の季節について

2.1. 日本の四季文化

季節ごとに、咲く花の種類や木々の色が変わっている。季節によって収穫できる野菜、果物、海鮮がさまざまある。暑さ寒さだけでなく、自然の変化、食べ物など毎日の生活で季節の変化を感じられることが魅力である。日本では四季にちなんだ行事がたくさんある。例えば春はひな祭り、桃の節句、お花見、夏は花火、盆踊り、秋は月見、紅葉狩り、冬はお歳暮、冬至、クリスマス、年越しという具合である。 四季にちなんだ行事から季節を感じることが日本の文化の一つである。

3. 先行研究

3.1. 作品『四季折りおりオリ』

この作品は、2018年4月から2020年12月まで、来日してからの2年間の出来事を日記と年表にまとめたアートブックである。面白いこと、楽しいこと、辛いことの全てがつまった、留学生活の記録としてまとめている。日々の繋がりを意識するため、蛇腹で製本した。

3.2. 作品『隅すみ』

この作品は、日常生活の片隅に存在する楽しい風景を描いた、文字が一切ないカレンダーだ。日付の代わりに、その月に合わせた小さな絵を描くことで、四季が緩やかに移り変わることを表現している。

4. 作品『隠しカレンダー』

試作として、季節を感じられる『隠しカレンダー』を制作した（図1）。

このカレンダーは 1 ヶ月ごとに、日付の紙の下にイラストが描かれた2枚目の紙が隠されている。2枚目のイラストは、それぞれの月の季節の変化をイメージしたイラストを描いている。

日付の紙には30段の切り目があり、この切れ目にそって一日ごとに下から一段ずつ日付を切り離していくと、一ヶ月後には下にある季節の絵が全て現れる仕掛けとなっている。

この繊細な四季の移り変わりをカレンダーで表現したいと考えた。

1日すぎるごとに、2枚目のイラストがゆっくりと見える様子と日本の四季が緩やかに移り変わる様子、ちぎって少しずつ姿を見せるカレンダーのにした。

また、一日一日を大切に過ごそうという意味も込めている。

図1『隠しカレンダー』の一部

1月、早咲きの寒椿は真冬に開花し、冬の雪の背景に深紅の色が人々に強い印象を残す。日付の切れ目を一段ずつ切り離していくと、徐々に雪が積もる風景が現れる仕組みになっている。

2月の行事食として、節分の福豆、恵方巻きがある。雪柳は、垂れた長い枝に白い小さな花を沢山つけることが特徴である。花の開花時期と雪の降る風景のイメージを重ね合わせ、表現した。

3月は厳しい冬が終わり、野に山に、街にふりそそぐ暖かい日ざしを表現した。ゆっくりと植物が芽を出す、春の訪れを意識して描いた。

4月は桜が開花する季節である。徐々に桜の花弁が開き、満開になる様子を表現した。

5月は爽やかな気候の日が増える。また、草木の青さも目立ち、新鮮さを感じることが増える。また、5月は行事やイベントも多く、祝日の表記を工夫した。

6月の特徴的な気候として梅雨が挙げられる。しとしと降る雨に濡れて咲く紫陽花は青、紫、桃色がふんわりと混ざり合い、雨の日特有の霞がかったような空気の中でとても幻想的に映る。その様子が鑑賞者に伝わるよう、意識して描いた。

7月は各地で夏祭りが開催される。また、家でくつろぎ、スイカを食べて過ごす夏によく見られる生活の様子を描いた。

8月は日本の夏を彩る花火を描いた。一日過ぎるごとに絢爛な花火を各色用いて打ちあげる、色鮮やかに咲く花火の姿を表現した。

9月の季節の行事に月見がある。一ヶ月の月の満ち欠けを描いた。

10月は豊作の季節である。また、金木犀の花が咲き、花の香りが季節の訪れを伝える風景を表現した。

11月になるにつれ葉は本格的に赤く色づき始める。葉の色が変わるにつれてだんだんと冬に向かって気温は寒くなる。芸妓の後ろ姿は銀杏の葉を描いた。

12月は北海道など北国で本格的な雪が降る。木々の葉を落とし、姿を変えた山の風景を表現した。

時間の経過を四季の風景の移り変わりと重ね合わせ、また楽しい生活の気持ちを表現した。

5.1. 作品「草木染め色見本帳」

「日本の草木染め」

草木染とは、昔からの自然の植物を染料とした染色を指す。草木染の名前は、化学染色と区別するための山崎斌の造語(昭和5年)であるといわれている。

また、草木染は天然染料であり、これらは植物染料、動物染料、鉱物染料の三つに分類される。その中でも植物染料が天然染料の大多数を占めている。

今回は天然染料に注目した色見本を制作した。制作を通じ、「草木染め」に使われている伝統色について考察し、日本の四季の移り変わりを表現した。

5.2. 和紙による草木染め

4月から次年の3月まで、季節の順序で色の変化が見える色見本帳を制作した。

蘇芳、スミレ、紅花、よもぎ、梔子、槐樹など約16種類の植

物を採取、染色し、日本の伝統色を紹介する。草木染めのより繊細な色変化を実物による染色で表現し、見本帳にする。(図 2)。

図 2『和紙の草木染め試作』

それぞれの媒染による色の違いは以下の通りである(図 3)。

・蘇芳染めの媒染
浅蘇芳/無媒染、深蘇芳/ ミョウバン、樺茶/硫酸銅、似せ紫/硫酸鉄

・黄肌染めの媒染
黄色/無媒染、黄肌色/ ミョウバン 、深黄/硫酸鉄

・茜染めの媒染
黄赤色/無媒染、黄赤色/ミョウバン、赤色/硫酸銅

・柘榴染めの媒染
黄色/ 無媒染、黄色/ ミョウバン、金茶/ 硫酸銅、 檳榔子黒/硫酸鉄

図 3『色見本表』

5.3. 和紙による草木染め色見本帳

草木染め色見本帳は色の変化が一目でわかるが、草木の形をイラストレー ションにすることでさらに植物を認識できるようにした。選んだ植物の本来の色と、草木染めで現れる植物の色の違いを紙の風合いとともに楽しむことができる。

また、草木染めはその植物の葉や種からも染色できるため、鑑賞者は植物についての認識も深めることができる。染色につかった草木をイラストと写真をのせることにより、実感できる。植物は春から冬にかけて順に並んでいる(図 4)。

図 4『草木染め色見本』

5.4. 作品「気持ちの日記」

植物の採取時期による色の違いや、季節による染色の向き不向きによって、染色を行う季節は自然と固定される。だから四季移ろいを表すためには、草木染めの技法で取り組む。染色技術は古来より脈々と我々に伝えられてきた(図 5)。

図 5『媒介による草木染め試作』

日本四季の魅力を考察し、草木染めの媒染方法や乾燥方法を変化させることで現れた染色の表情を美しさや特徴としてとらえ、新しい表現を生み出した。

作品「気持ちの日記」では、日記という形で四季の風景の瞬間を切り取り、和紙染めで表現した。切り取った瞬間を四

季の順番に並べ、蛇腹で製本することによって四季の移ろいを表現した(図 6)。

図 6『気持ちの日記』

おわりに

2022年度は日本画、伝統色などの日本の文化的資産について調べた。その後、四季と文化と人々の関係性を考察し、隠しカレンダーとして作品を制作した。

空気感や季節の変化等の細かい移ろいを考慮しているデザインは多くない。本研究は、人々が自然の豊さを享受することができるグラフィックデザインを生み出すことを目指している。今後は、身近にあるすべての自然を新しい視覚的なデザイン言語として、作品を制作していきたい。

他参考文献

・小松 史枝、『季語にみられる色彩語の用法』、日本色彩学会、(2007/6/1)
・ 松尾 聰、『枕草子 新編 日本古典文学全集』、小学館、(1997/11/20)
・小町谷 照彦、『古今和歌集と歌ことば表現』、岩波書店、(1994/10/24)
・伊原 昭、『文学にみる日本の色』、朝日新聞社、(1994/2/25)
・牧野 富太郎、『牧野日本植物図鑑』、北隆館、(1989/7/1)
・前田 于寸、『日本色彩文化史』、岩波書店、(1983)
・吉岡 幸雄、『和み 百色一日本 四季を彩る』、PHP 研究所、(2005)
・山崎 和樹、『草木染 四季の自然を染める』、山と渓谷社、(2014)
・山崎 青樹、『草木染の事典』、東京堂出版社、(1981)
・吉岡 幸雄、『日本の色辞典』、紫紅社、(2000/6/1)
・東山 魁夷、『東山魁夷の世界』、美術年鑑社、(2005/4/1)